

# 北斎が描いた小布施祭屋台天井絵の動物・植物・文様(一)

——鳳凰は北斎絵手本にどう描かれているか——

竹内 隆

## はじめに

北斎館に収蔵・展示されている長野県宝の小布施町東町および上町<sup>かんまち</sup>所有の各祭屋台二基は、双方とも天井を二面に仕切り、各辺がほぼ正方形(東町区天井絵・一二三×一二六、上町区同・一一八×一一八<sup>メートル</sup>)で、葛飾北斎画の天井絵が二面ずつ掲げられている。このうち東町祭屋台天井絵(以下「東町天井絵」という。)は、前面には頭部を前方にした龍が一頭、後方には同じく頭部を前方にした鳳凰が一羽描かれている。一方、上町祭屋台天井絵(以下「上町天井絵」)を見ると、二面とも四周には動植物や文様などで飾られた縁絵と、その中に大きな浪図が描かれている。この浪図は、周りから絵の中心に向かって、先端には「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」と同じようにC字形の浪爪をもった大きな波濤と、ベロ藍の濃淡を利用した渦巻が描かれ、あたかも渦の中に引き込まれるような浪図が描かれている。二面の浪図は浪の激しさや縁絵の内容などを総合して、一方は男浪図、他方は女浪図と呼ばれている。

北斎の最晩年の作品でもある「東町天井絵」及び「上町天井絵」に描かれた動物や植物・文様は、北斎がそれまでに弟子や画を嗜む人たちに手本として描き示した絵手本にはどのように描かれているのか。また小布施町

内の岩松院及び近隣の須坂市寿泉院には、北斎あるいは北斎の弟子で北斎を小布施に招いた高井鴻山の筆による鳳凰図が天井に掲げられている。今回はとくにそうした鳳凰図について、北斎絵手本との関連を見ていきたい。さらに伝説上の鳥である鳳凰に対して、町内の祭屋台天井絵に描かれている鳥で一部は鳳凰と似ていると思われる風鳥(男浪図縁絵・北斎研究所『研究紀要第五集』)やサンジャク(山鵲)にもふれてみたい。

動物としては「東町天井絵」に龍や鳳凰がみごとに描かれている。一方「上町天井絵」の縁絵(図1八枚中二枚掲載。全図八枚は『研究紀要第五集』口絵参照)をみると、男浪図の縁絵には主に動物が描かれ、四辺のうち三頭の獅子が描かれた辺(縁絵)の対面には甲羅をもった犀が、また一方の孔雀の対面には風鳥が対をなし、植物とともに描かれている。女浪図の縁絵を見ると、一体として図案に用いられることが多いブドウとリス及びその先には、赤い羽根の鳥がいずれも雌雄一体で描かれた一辺がある。隣には肩に両翼をつけた裸体の男子が弓状の花の茎をつかんでおり、この人物の解釈には多説あり、エンジェルだという人まである。残る二辺には牡丹やブドウなどの植物が描かれている。こうした縁絵も含めて天井絵に描かれた動植物のうち動物は、龍・鳳凰・麒麟など古代中国に起源をもち、古くから日本に伝えられてその後の時代を経てくるなかで姿・形を整え、神話や伝承を通じて意味するところを形成してきたものがある。

これらの動物をみると

- ・ 超越的な力を持つ。
- ・ 一般の動物とは異なる非動物的な生態である。
- ・ 特異な身体を持つ

このような特色を持つからこそ、神をたたえ祝い寿ぐ祭りにおいて、神を招き寄せる依り代として祭屋台の舞台天井に掲げられていると思われる。

天井絵に描かれた龍や鳳凰などの幻想動物は、ヒトに善をもたらずか、あるいは悪や破壊をもたらずか、また特異な体をもつかなどにより、神か妖怪かに分けられることが多い。しかし、神でも妖怪でもなく奇怪な体を持つ動物として、文献に記されたものも少なくないといわれる。これらの幻想動物について中国の古典書物に記されたものとして、『抱朴子』『詩経』『山海経』『説文解字』などがある。しかし文中に描かれた絵についてはすでに失われ、後世になってから文章を読んで復元した絵であるといわれる。

浪図縁絵には動物だけでなく、女浪図を主として、牡丹ほか名称は判然としないが多くの植物が描かれている。さらに浪図の四隅八か所には、幾何学的文様が描かれている。こうした動植物や文様について、北斎は『北斎漫画』や『絵本彩色通』などの絵手本中に、どのように示しているのか、背景となる事項についてもあたってみたい。対象となる事項は少なくないが、鳳凰からあたっていく。

図1 右は男浪図の縁絵の一。背に甲羅をもつ犀。左は女浪図の縁絵で羽根のある男を描く



## 一 絵手本の作成に向かった北斎

### (一) 絵画技法の踏襲

#### 非公開・狩野派の絵手本

北斎は東町及び上町の祭屋台天井絵を描くにあたり、祭屋台という神に関わる場であることの制約や、画面が正方形であること、あるいは極彩色の絵具を使用することに伴う高額の費用負担などの課題があったことと思われる。こうしたことをクリアしながら北斎は描画を進めたが、画面が正方形であることと、龍や鳳凰さらに浪図の絵模様が円形の構造であることとは、密接な関係があるものと思われる（後述「二（四）北斎の案出・方形の天井に円形の「龍図」「鳳凰図」」。北斎最晩年の作品であるこれらの天井絵と、北斎が弟子たちに手本として示した絵手本との関わりを見ていく。

絵手本とは門人や絵を学びたい人のために図様を示した手本のこと、江戸時代の狩野派では弟子は師から与えられた絵手本の写しである粉本を、繰り返して学ぶことで技能を習得した。加えて秘伝とされて踏襲される絵画技法は、狩野派内だけに伝えられる学びであって、一般には非公開であった。しかし狩野派の絵師・林守信（筑前国）は一八世紀初め（享保六年・一七二二）版本『画筌』（図2）を世に出し、狩野派内部の技法を公開した。このため描画の例や技法・理論が明らかとなり、絵を学ぶ者にとって大変重宝された。

手本となった版本は国内だけのものではなく、中国清朝初頭の17世紀初めに刊行された『芥子園画伝』（画論と技法。著名な絵の彩色版画。北斎研究所『研究紀要第六集』口絵参照）は発刊後間もなく日本に輸入されて、翻刻本が何度も出版され、山水画や花鳥画を学ぶ者のテキストとして盛んに